

旧友会



夫が定年になって鹿児島に戻ってから五年が経った。夫の会社では定年退職した人々が旧友会という会を結成していて、その九州支部の事務所は福岡支店の一角にある。年一回支部総会があつて、会議のあとの懇親会で旧交を温め合つている。夫はそれを楽しみにして毎年少かさず出席して来た。

今年は会議の前に福岡博多座の「細川たかしショー」が組み込まれているとのこと。夫は私も同伴で申し込んでくれた。私自身は、わざわざ博多まで見に行くほど歌謡ショーに興味があるわけでもないのだが、夫が電話で嬉しそうに申し込んでいるのを見て、「ま、行つてみるか」と思った。

川内駅から福岡まで特急「つばめ」でも三時間以上かかるから、前夜と当日の二泊は必要である。しかもその翌日はどうしても十時までに戻らねばならない用事があつて、博多始発の特急でも間に合わない。結局車で行かざるを得ないこととなつた。どうせ車で行くのなら朝早く出て、どこか見物しながら行こうとガイドブックを開いた。そして夫も知らない唐津に立ち寄つて行くことに決めた。

朝六時出発の予定が七時になつた。高速に入る横川までに一時間かかった。あとはひたすら北進である。鳥栖から西に曲がる長崎道に入ったのは十時を回つたころだつた。多久で高速を下りて唐津を目指す。薄曇りの彼方に見えてきて先ずは唐津城に向かった。城前の駐車場を下りて石垣を登るのだが、時間と体力の節約をしてエレベーターで本丸まで上がる。期待した眺望だつたが、厚い雨雲の下、虹の松原は霞の中で海も鉛色である。晴れていれば気にならないのだろうが、手前の雑然としたビルが目に入つて、景觀を損ねているのが気になつた。実際

には無かった立派な天守閣が造られていた。観光目的のこつした物は却って興ざめものなのに。

立ち寄った曳山展示場は圧巻だった。三四メートルもあるだろう大きな立派な曳山が十何個か陳列されていた。漆や金がふんだんに使われ、デフォルメも様々で実に凝っていて江戸時代の唐津の繁栄を充分偲はせる。

玄界灘を左に見て一路博多へ向かう。三時頃会社に着き挨拶を済ませ、予約してもらった近くのホテルにチェックインした。

夜までの間散策しようとロビーに出ると、夫の同期のNさんがチェックインしているところだった。重役として会社に残った彼は旧友会の客として東京から来たのだった。

「あとでお茶でも飲もう。帰ったら電話するよ。」

彼は早口に言つとホテルの前に待つていた車でそそくさと消えた。私たちは大濠公園から黒田氏の福岡城をぶらぶらと歩き、石垣の立派さに流石と満足して帰った。

Nさんの電話は十時頃だったか、遅いから明朝九時にロビーでという。観劇は十時半に会社に集合ということである。

翌朝三人で近くの喫茶店に寄った。Nさんとは三十年ぶりだったが、あまり変わっていない。この不透明で困難な時代の経営の難しさなどが話題だった。私は夫が会社に残らず鹿児島に帰ったことが正解だと思つているので、素直に重役もご苦労なこと聞いていた。

博多座は立派な劇場だった。細川たかしと朝丘雪路の芝居もなかなかの熱演だったし、舞台装置が間隙も置かずに変わることに感心した。細川たかしの熱唱もなかなかのものだった。また支部の用意してくださった特注のお弁当が大変心の籠もった凝つたもので、本当においしかった。

四時からある会館で支部総会があり、そのあと懇親会の予定である。私は特別に懇親会に参加させて頂くことになっていた。ロビーで総会の終わるのを待つていると、現役の福岡支店の役職の方々も四五

人見えた。

懇親会は三十人ほどで、六人つつの円卓だった。挨拶のあと新人が二名紹介された。一人はかつて夫の配下について、引越しの手伝いに来たことがあった。なかなかの猛者だったが、いつか落ち着いた雰囲気になっっていた。

女性が二名いて、私は彼女たちと同じテーブルだった。聞くとお二人とも独身で定年まで福岡支店で働いていたという。もう七十歳というのにとっても若々しい。

「私達は一生をこの会社に捧げて来たのよ。それを誇りに思っているわ。本当によい会社だった」

赤の混じった薄い上着を着た体格のいい人が遠くを見るような目をして言った。小柄で黒の水玉のワンピースを着た人も深く頷く。

大方の男性が三年ほどで転勤して行く中、彼女たちがしつかりと実務を握っていたのだらう。そんな自負を感じさせる言葉だった。

貧しかった時代ののびやかな明るい雰囲気のある会社

はもはや過去のものであろう。豊かになった今、失ったものの大きさに深く思いを致す夜であった。